

作物名：いちご
病害虫名：灰色かび病（病原：*Botrytis cinerea*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 主に果実に発生するが、花弁や葉、葉柄、果梗など地上部のあらゆる組織を侵す。
- 果実では特に収穫期に近い成熟果が発病しやすく、初め暗褐色の病斑を生じ、しだいに拡大し果実を軟化腐敗させ、湿度が高いと全体に灰色のかびを密生する。
- 果梗、葉柄には暗褐色の病斑を生じ、病勢が進展すると多湿時には灰色のかびを密生する。



写真1 果実の病徴

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は被害植物で分生子、菌糸の形または土中で菌核の形で生存し伝染源となる。病斑上に形成される分生子が空気中に飛散して伝染を繰り返す。
- 本病菌は傷口や枯死した部分から侵入するため、老花葉や枯死葉などは初期の寄生部位となり有力な伝染源となる。果実では、初め枯死した花弁や雌しべの柱頭に寄生し、果肉へ拡大する。



写真2 果梗の病徴

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、菌の生育温度は最低2℃、最高31℃で、適温は20～23℃である。また、多犯性でいちごの他にもきゅうりやトマトなど多くの野菜、花き類や果樹類に寄生する。
- 分生子の飛散は曇雨天のときに多く、多湿条件で多量の分生子を形成する。施設栽培では曇雨天が続くと、ハウス内が多湿となりまん延する。

4 防除方法

- 発病果に形成された分生子が二次伝染源となるので、発病果はみつけしだい取り除き、ほ場外へ持ち出して処分する。
- 株が混み合わないよう不用な下葉は整理し通風を良くする。
- ハウス内が多湿にならないよう換気を行う。
- 薬剤散布は発生初期のうちに予防的に行うとともに、上記の対策を併せて実施する。

（令和5年9月改訂）